

愚かさと詩

(第21回メデジン国際詩祭講演原稿)

Ban'ya NATSUIISHI

夏石番矢

2011年3月の地震、津波、そしてそれらに続く原発爆発という日本の大災害ののち、私は人間の条件そして人間の愚かさを考えている自分に気づきました。日本人の愚かさ、さらに広く人類の愚かさ。この数か月、人間の愚かさという観念にとりつかれていました。

第二次世界大戦後、アルベール・カミュ、ジャン・ポール・サルトルといったフランスの知識人は、戦争全体がもたらしたヨーロッパの荒廃と廃墟を見据え、非合理性や人間と自然の中核にある愚かさとつながりながら、哲学と文学を生み出しました。彼らが創出した哲学は、実存主義であり、愚かさの文学、演劇、そして愚かさの小説でした。

私の初期の俳句は、人間の条件である愚かさについての実存主義的立場に沿ったものです。

驢馬ノ耳へ駢駢トシテ嘔吐スベシ

(夏石番矢『真空律』、1987年、思潮社)

日本の2011年3月の大災害後、津波という海の怒りによって多くの都市や村が流されて、荒廃した日本の東北地方をまだ訪れていませんが、テレビの汚れた白黒画像で、津波の破局的破壊の道筋のイメージが繰り返されたことを私は忘れられません。これらの出来事やイメージに対する生の反応に基づき、いくつかの俳句を作りました。

すべてをなめる波の巨大な舌に愛なし
誰も見つめられない津波に消された人たち

(「吟遊」第50号、2011年5月、吟遊社)

私が見た津波のイメージは、疑いなく、自然は人類に比較するとあまりにも大き過ぎ、自然は人類に対して実存的に無関心だと確証しています。多元的宇宙を持つ人間は、蟻ですらないのです。したがって、言うまでもなく、私たちの自然への愛は、極度に理由のないものです。馬鹿げている、あるいは愚かで報われない愛です。

そして疑問が差し出されます、とくに俳句の書き手に対して。自然は美しいとほんとうに言えるのだろうか？ ためらいなく、私たちは自然を愛せるのだろうか？ 自然を「母なる大自然」として、私たちをはぐくむ自然として見なし続けられるのだろうか？ これらの疑問への答えは、見つけられるでしょうが、何世紀もあふれかえっていた凡庸で表面的な自然観を考え直すことが求められます。

2011年3月の三重の大災害による物理的被害が最小限である日本の首都圏で、私は亡霊のように暮らしていると感じます。ほとんどのビルは無傷です。巨大地震ののちに起きると想像された、ビルからのガラスの雨の落下は起きませんでした。実際、電車の本数が減らされ、街角からあかりが少し消えただけです。それにもかかわらず、ヨーロッパの街角より、日本の街角のほうが、いまなおずっと明るいのです。正直なところ、電気の節約が起きただけです。これらの事実焦点を当てた俳句を書きました。

極東の不夜城へ津波千年の怒り

(「吟遊」第50号、2011年5月、吟遊社)

放射能については、私たちの状況は、比類のないものです。まき散らされた放射能は、チェルノブイリを超えるでしょう。Fukushima (福島) は、悪名高き放射能の首都です。この信じがたく、不名誉な事実に対して、私はまじめで謙虚な謝罪を表明しなければならないと感じます。

1945年に広島と長崎で、日本人は原爆攻撃を体験しました。日本の詩人で、広島原爆生存者の峠三吉は、「炎」という詩を、次のような行で終わらせています。

1945, Aug. 6
まひるの中の真夜
人間が神に加えた
たしかな火刑。

この一夜
ひろしまの火光は
人類の寢床に映り
歴史はやがて
すべての神に似るものを
待ち伏せる

(『峠三吉原爆詩集』、2003年、下関原爆展事務局)

この「すべての神に似るもの」は、少なくともこれまで理解していたところでは、この世の終末を暗示しています。あるいはまた、福島で燃える核の火に、これを見出されるのでしょうか？ これらの見えない火は、いまや今後続く日本の歴史の支配者です。待ち伏せている「すべての神に似るもの」は、日本の愚かさだとあえて私は言いましょう。自分たちの島に、原爆攻撃の語りつくせない恐怖を二度も経験したのちに、なんと、きよらかな国土に米国から原子炉を輸入した愚かさです。この場合、日本は、先立つ恐ろしい核の体験を忘れた加害者であると同時に被害者です。日本の愚かさの中核に、忘却が横たわっています。

日本の愚かさに加えて、潜在的に制御不能な原子炉事故に甘え、決定的に核兵器に頼る、人類全体と人類の愚かさを、私は免責することができません。

この愚かさ直面し、この残忍さに直面し、たった一人の人間に何ができるのでしょうか？ 俳人として、次の俳句を返答として書きました。

愚かさや海岸の怪獣へ津波

(「吟遊」第50号、2011年5月、吟遊社)

日本人だけでなく、人間すべては、愚かさに従属するのだろうか、と自問しています。人間の英知の可能性を認めながら、そうだと、違ふとも、答えることができます。

日本ではいま、テレビや新聞を巻き込む別の愚かさを体験しています。2011年3月の大災害について、とくに福島原発崩壊についての報道は、大衆に間違った情報を与えることにふけりました。それは、いかなる国におけるいかなるマスメディアの運命かもしれませんが、2011年3月11日以降、日本のニュース報道は、真実隠蔽に重大な行き過ぎを犯すことへと進み、「問題ありません、問題ありません」とずっと繰り返し言い続けてきました。この大衆へ嘘の繰り返しは、愚かさの許しがたき別の事例です。

福島原発の状態についての人々への嘘の繰り返しの結果、ニュースへの信頼は、完全に失われました。真実なき人々は、亡霊のようであり、実体がありません。現在の状況とは反対に、日本の詩歌は、ことばの力と真実を信じてきました。十世紀の初め、日本の和歌詩人、紀貫之は、勅撰和歌集『古今集』の序文を、言語の性質についてのかかなり自信に満ちた暗示的な文章で始めています。

やまとうたは人の心を種として万の言の葉とぞなれりける。(中略) 生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。

この意味は、人間の心が和歌の種子であり、そこからたくさんの葉が繁り出すということです。命あるすべての生き物が、どうして詩を作らないでいられるか、ということです。

ここで、紀貫之は、コロンブス以前の南米での信仰にかなり近い、アニミズムの詩学を表現しています。

日本人にとって、動物、植物、人間は、生まれた時から、ひとしく、創造的で生き生きした詩人だったのです。日本の詩は、その発生から、自然界の全活性化力と密接につながっていました。この世界の真実を表現する日本の詩は、宇宙の最も重要な一面と、つねに考えられてきました。

日本の詩のエッセンスは、俳句です。その最も偉大な傑作は、1689年に芭蕉によって達成されました。その作品で、芭蕉は、自然のダイナミックな三角を詠んでいます。これがその詩です。

荒海や佐渡に横たふ天の河

これは単なる風景ではありません。この短詩は、海、島、銀河という三つの要素からなることばの星雲を創出しています。人は島に住んでいます。芭蕉にとって、人間を含む自然は、詩と生命の力の源泉です。たとえ、自然が人間をもてなさなくとも。芭蕉は、単純なエコロジストではありません。ダイナミックで不安定な宇宙を深く理解したアニミズムの詩人です。

日本のいまの愚かさは、アニミズム的基盤の意識の喪失に由来すると、かなり容易に言えます。この喪失は、自然を犠牲にして人間の本質に焦点を当て、実際に人間の活動を平べったくし、その活動から内実を失わせ、相互関係を欠落させました。

もう一方で、人類全体の愚かさの主要な理由は何でしょうか？ 人間の自己中心主義でしょうか？ 人間の貪欲さ

でしょうか？ 人間の嫉妬でしょうか？ 単なる無知でしょうか。

多くの国際詩祭に参加して、私は、いわゆる人間文明と先進国が、詩の必要性和詩の力を失っているのに気づきました。言うまでもなく、私は共産主義を、交代にふさわしい選択肢として擁護する気はありません。なぜなら、共産主義は、しばしば抑圧と欺瞞に連関しているからです。

けれども、いわゆる文明社会、先進的自由主義国で、人々は、全体性や、人間とそれ以外の自然の完全性から隔離されています。

2007年、東京の明治大学で、招聘者講演のさい、私の海外の友人のうち最もすぐれた一人、リトアニア詩人のうち最も抜きん出た一人、コルネリユス・プラテリスは、きわめて興味深い観察を語ってくれました。リトアニアのソ連占領時代、詩は、占領を耐え忍ばなければならない人々にとってすべてでした。もちろん、詩は、人々にとってたくさんの事柄だったのです。詩であり、ジャーナリズムであり、喜びであり、挑戦であり、また涙を誘うものでした。詩の本は、当時とてもよく売れました。

ソビエト支配からの彼の国の独立後、この独立はソビエト崩壊の引き金を引きましたが、詩は重要性を減少させました。これは、西側諸国では、一般的に見られる事実です。

この実例は、詩が文化の本質的中核であり、西洋化と資本主義が、詩を文化のなかで小さくし二次的にしていることを示しています。

プラテリスは、この観点につき、大変示唆的な俳句を書いています。

Miškas skendi savy,
tik po storu ledu
upokšnis be garso alma.

森は重みで沈み
厚い氷の下
川はちよろちよろ流れる

(「吟遊」第31号、2006年7月、吟遊社)

詩は、もちろん俳句を含む詩は、「厚い氷」の下にある「川」でしょう。個人的愚かさ、地域的愚かさ、国際的愚かさなどの私たちの愚かさは、「厚い氷」です。詩は、私たちの愚かさを融かすことはできませんが、それでも生き続けます。いかなる優れた詩人も、愚かさを免れないけれども、地下水のような詩を産み出すことができます。地下水は枯れるかもしれない。だが、大地が砂漠になっても、流れ続けます。

前途ある未来を持っていた青春時代、私は次の俳句を書きました。

未来より滝を吹き割る風来たる

(夏石番矢『メトロポリティック』、1985年、牧羊社)

地下水としての詩は、このような宇宙生成的な滝になりえるのです。